

我が街の記念碑

日野の渡し跡

多摩モノレール
柴崎体育館駅
徒歩6分



旧甲州街道の多摩川渡河地点にある日野の渡し碑

【日野・書記・三角幸太郎通信員】前は甲州街道の要所「日野宿」を紹介しました。今回は国宝「高幡不動尊」や多摩動物公園の門前に立つ「実物以上の大きさの象の像」などを紹介しようかと思いましたが、有名なので存じの方も多かったらうと、前回紹介した日野宿にからめて、ちょっとマニアックな「日野の渡し跡」を紹介したいと思



【日野の渡し跡】多摩川を渡るには、柴崎村（現立川市）との間で農耕などのために使われていた日野の渡しを、多摩川の氾濫により甲州街道が分断されてしまったことにより、幕府が甲州街道の正式な渡しとして決定し、以後、大正15年（1920年）まで240年余り使われ続けられま

240年使われ続けた江戸時代の往来を感じる地

た。渡しは有料で人や馬などを運んでいましたが、その経営と管理は日野宿が行ない、宿場経営の重要な収入源となり、そうして日野宿も発展していきや

かになっていきました。日野宿を利用する人は無料で渡しを利用できたそうです。江戸時代が終わるとその管理は宿場から町に移されましたが、明治中期に現在の中央線が開通すると渡しの通行量が激減し始めました。そして、日野橋が大正15年に開通したことによって、この「日野の渡し」の幕は閉じました。

小さい声で言いますが、「日野の渡し」の記念碑は多摩川の立川側にあります。日野市側には看板があるだけです。「それじゃ、日野市の紹介ではないじゃないか」というお叱りはお勘弁ください（汗）。

さて皆さん、日野橋や立川橋を通る際は、多摩川を眺めながら江戸時代の人の往来を感じてみてください。どこか懐かしい気持ちになると思います。



忘れえぬこと

桜を見ると思い出す

父の歩んだ激動の昭和

石工 磯貝正昭



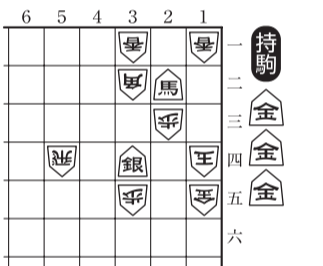
桜の季節になると思い出するのは、45年前、父が日光鬼怒川の労災病院で亡くなった時の病室から見た、散り行く桜です。父が発病したのは、大阪万博を仲間と観に行った、その年の夏。不治の病と言われた肺と診断され、亡くな

るまで入院を繰り返す6年間でした。父は十代から石工として働き、結婚後すぐに太平洋戦争に出征、北京・インドネシア・ビルマなど転戦し、よく無事に帰れたと思うような過酷な経験をしました。戦争についてあまり語らなかった父ですが、片足を失ったかも知れない銃弾の跡がありました。戦後、立川市に住んでいましたが、縁あって文京区で仕事をすることに。力仕事をしながらの通勤は大変だったと

思い出すが、たまには新宿で降りて遊んだようでした。文京区に店を構えたのは、昭和29年。この頃、東京土建に加入しました。昭和33年の台東支部結成記念の集合写真に台東支部の遠藤委員長の父と共に写っています。親子2代に渡り組合と係りを持ち、強い繋がりを感じます。私が仕事を継ぐのを迷っていた時、迷っているならやらない。仕事はそんなに甘くないぞと言われた事、「道具は自分の手になるように、自分で作らなければだめなんだ」と嬉しそうに私の道具を揃えていた姿など思い出します。父の歩いた道は大変な人生でしたが、組合の仲間と共に行動してきた事は、大きな希望と喜びだったでしょう。コロナ禍の今、我々も一層強い繋がりを持ちたいと思います。（文京）

お猪口2〜3杯で真っ赤になってしまっ下戸だった。しかし師と仰ぐ岡倉天心に、「酒の一升くらい飲めずにどうする」と叱咤され、飲んで吐きながら訓練した結果、人生後半の50年は飯をほとんど口にせず酒と少量の野菜だけで済ませていたという。毎日約1升もの酒を飲んでいただけにも関わらず、アルコール中毒はおろか、大病もせずに90年近い寿命をまっとうした。

詰将棋



チョット一服(1030)

森オリ・パラ大会組織委員会会長の「女性がたくさん入っている理事会の会議は時間がかかる」発言が、女性蔑視だとする批判が広がった。こんな会長のもとのオリ・パラ開催はとんでもないという意見まで出ているようだ。森会長の辞任要求が国会で

も出たが、大会組織委員会の反応は鈍かった。速やかに辞任を決めれば、大会中止まで求める批判はかわせたのかも知れない。しかし自民党の二階幹事長の、ボランティア辞退は「瞬間的に言っている」発言で、また批判に火をつけた。守るべきものを見間違えて、オリ・パラ開催の足を引っ張っている始末だ。



しあわせの絵の具 愛を描く人 モード・ルイス

実在するカナダの女性画家の半生

実は優しい秘めた漁師役を熱演している。森、雪、海といった厳しくも美しい映像で淡々と進んでいく物語。モードが描き出す命の輝きに包まれていくうちに、無くしかけていた優しい気持ちを取り戻しつつあることに、気づかされるに違いない。

実在するカナダの女性画家モード・ルイスと彼女の夫の半生を描いた本作は、アシユリング・ウォルシュ監督によるカナダ・アイルランド合作映画。モードになりきったサリー・ホーキンスの演技力には圧倒される。エベレット役のイーサン・ホークも、不器用だが

カナダ東部の小さな港町で叔母と暮らすモードは、子どもの頃から重いリウマチを患い、一族から厄介者扱いを受けていた。ある日、買い物中の雑貨店で家政婦募集の貼り紙を依頼するエベレットに遭遇した彼女は、叔母の激しい束縛から逃れようと、彼が漁師として暮らす町外れの小屋に自分を雇ってくれと押しかける。 「歩き方が変わった。障害でも？」。モードを見るなり不機嫌な問いを投げかけるエベレット。 「歩き方が変わった。小屋に来る途中でも子どもたちを右を投げられたというモードは、「人って自分と違う人間を嫌うの」と笑って答える。 結局、エベレットの小屋で住み込み家政婦として働

